

【氏名】山口 睦

【所属大学院】（助成決定時）東北大学大学院環境科学研究科

【研究題目】

近代を支えた弟たち ―ある農家の次男の日露戦争従軍日記を中心に―

【研究の目的】

本研究は、日露戦争に従軍した一兵卒の行動、心情の理解から、地域社会における「戦争」の位置づけを解明することを目的とする。それによって、国家の側からの政治史や軍事史とは異なる、一般市民からみた「戦争」史を提示できると考える。

本研究で取り上げる、山形県南陽市のA家は地主として、農業を営みつつ当該地区の代表者を歴任してきた。主な資料は、A家の3名の従軍者が入隊、除隊した際の餞別や祝いの記録（1900年～1943年の6冊）と、日露戦争に従軍した5代当主の次男が現役兵期間中に残した日記（1900年11月～1903年12月）である。

近年、日記や手紙、聞き取りなどを用いた「民衆のまなざし」からの戦争についての研究成果が多く世にでている。本研究は、日露戦争直前の平時という日記が書かれた時期の特殊性、出征や凱旋の際の餞別、祝いの贈答記録を利用する点に独自性がある。これらの資料から、農家の次男がいかにして「日本国兵士」になったのか、地域社会において従軍がもつ意味はどのようなものだったのか、という点を明らかにする。

【研究の内容・方法】

本研究は次の三点を内容とした。1) 日記の解読から日露戦争直前の従軍生活を再構成、2) 入隊、退役時の贈答関係の整理、3) A家における聞き取り調査、である。

日記に関しては、配属軍隊、訓練、入営、退役など、事実関係の把握に努めた。日記の著者（1881?－1947）は、1900年12月に青森県弘前市の第八師団野戦砲兵第八連隊に現役兵として入営した。彼の3年間に及ぶ兵営生活は、日々の訓練、野外演習、休日、祭日、入営・退営の際の移動、函館旅行などで構成されている。

特に入営について、故郷を離れてから入営するまでの行程表を作成、再現調査を行い日記作成者の心情の抽出を試みた。入営の旅は、単なる移動ではなく、同じ境遇にある若者との自動車での交流、各駅での盛大な見送り、仙台遊覧という楽しみなどの要素により構成される、ある農家の次男が、地域社会から脱し、日本国の兵士になっていく道のりであったといえる。

また、入隊や退役の際に開かれる祝宴、餞別のやりとりを贈答記録から再構成した。入営や出征に関する餞別は、現金が多く、贈与者の規模も年代を下るに従い増加（1904年の52件から1943年の133件）する。1943年には130件を超える餞別が贈られ、A家

の交際において葬儀に継ぐ規模となり、地域社会における出征行事の社会的重要性が指摘できる。逆に、2件ある満期退営祝、凱旋祝については贈与件数が26件、30件と親族や隣組などが集まるより私的な行事であったことがわかった。

A家における聞き取りから、従軍した3名が6代当主、7代当主の弟たちであったことがわかった。1名は徴集、残り2名はいずれも満洲の陸軍と海軍に志願している。継ぐべき家のない弟たちにとって、志願は地域的、社会的移動を可能にする一つの手段ともなっていた。

【結論・考察】

本研究で浮かび上がってきた地域社会における餞別の贈与や見送り行事、入営地までの道のりにおける他の地域住民との交流、新兵との交流、そして入営地における兵士に対する支援などが、一人の青年が「国民」となり「日本国の兵士」となるために重要な役割を果たしていたことが明らかになった。これらの交流は、大部分の人々にとって戦争という近代国家がもたらした新しい機会に付随して起こった、「国民」としての新しい経験であった。

また、近代に入り、長男子相続を基本とする旧民法、戸籍制度の整備にともない、長男と弟たちとの間には、徴兵制度と関連して人生の選択肢に大きな違いがでた。A家の事例からわかるように、徴兵検査後、籤に当るかどうかを前提としながらも、家を継ぐ長兄は志願という道を選ばず、弟たちは様々な動機—就職機会や愛国心など—から積極的に志願した。こういった弟たちの多様な生き方がもたらす社会的流動性が、近代日本の発展に貢献してきたといえる。